

『赤い鳥』 ゆかりの地を訪ねる

「赤い鳥文学賞」はなぜ昭和46年に創設されたか

岡本 三保

●はじめに

小学校教諭をしています。司書教諭の資格はあります。スキルはまだありません。(まだよく身につけていません。)というわけで、県教委からは国内留学という形で認めてもらい、別府大学からは研究生として受け入れてもらって一年間の研修をしているところです。講義もいくつか聴講させていただいています。そうする中で「レファレンス演習」の課題の一つとして、『赤い鳥』について調べているとき、ちょうど上京するチャンスに恵まれました。そこで、予定より滞在日程を延ばして、『赤い鳥』ゆかりの地を訪ねることを思い立ちました。今回は、その顛末記のようなものを書いてみたいと思います。

その前に、どうして副題を“「赤い鳥文学賞」はなぜ昭和46年に創設されたか”としたかについて、少しお話しする必要があるかと思っています。

雑誌『赤い鳥』について調べ始めたとき、「赤い鳥文学賞」が昭和46年に創設されたことを知りました。『赤い鳥』は、昭和12年に終刊となったにも関わらず、なぜ34年も月日が経ってから創設されたのか。そのいきさつを探ることによって、日本の児童文学界に大きな功績を残したとされる『赤い鳥』が、その終刊後もどのような影響を及ぼしたのか、とりわけ昭和40年代の児童文学界には何があったのか、を知ることができる、ひいては、それが、私のこの一年間の研修テーマにもつながる、と考えたのです。

「赤い鳥文学賞」創設の中心人物は坪田譲治で、かつて自宅を開放して「文庫」を作ったそうです。それが、豊島区に今もあると知り、ぜひ訪ねてみたくなりました。近くには、郷土資料館などもあるようだし、そこに行けば「赤い鳥文学賞」創設についての何か有力な手がかりがあるかもしれない、そういう思いで上京しました。

●出発

10月27日、土曜日。羽田空港につくと、土砂降りの雨。出発前に薄手のコートを持参するべきかどうか迷ったけれど、薄手のコートではなくてレインコートが必要だったという思いがかすかに頭をよぎりました。後にこの小さな後悔は、大きな後悔となつてのしかかってくることになるのですが、ともあれ、いよいよ“「赤い鳥文学賞」を探る小さな旅”の始まりです。

●びわのみ文庫

やはり、まずは「びわのみ文庫」に向かいました。探し当てた場所に確かに「坪田」という表札はあるものの、どう見ても全く普通の個人のお宅、という風情です。入るのを躊躇していると、近くで道路工事現場の交通整理をしていた方が、「自分は地元の人ではないので詳しいことはわからないが、とにかく入ってみたら。」とわざわざ

雨の中を近寄って門を押し開けて下さいました。背中を押されるようにして入ってみると、「びわのみ文庫」と書かれた古い木の札が掛かっている小さな離れのような建物が。近くに人気もなく、長らく使われたような気配ありません。迂闊にも後で分かったことですが、今は休業中なのだそうです。

坪田譲治が「赤い鳥文学賞」を創設するにあたって、重要な役割を果たしたことは先ほども書きましたが、その坪田譲治が、昭和36年、“幼こないいときに読んだよい本は、その人の生涯を支えているものだ”と、蔵書を開放して、子ども達が本に親しむ場を作ったのが「びわのみ文庫」です。そこで子どもと語る坪田譲治の写真も残っています。坪田譲治を囲む子どもたちの表情の楽しそうなこと。そして、坪田譲治は、自分で買い物をしてきては、そこに来る人たちにご馳走するのを楽しみにしていたそうです。そう思って見ると、今は、人の気配を感じなくても、何だかその昔、にぎやかだった人々の笑い声や話し声が壁越しに聞こえてきそうな雰囲気の場所でした。

●豊島区立郷土資料館

「びわのみ文庫」の次は、そこから歩いて数分のところにある郷土資料館を訪ねました。残念ながら、ここには直接手がかりになるような資料はなかったのですが、職員の方が、わざわざ今年の「赤い鳥文学賞」の授賞式の写真の載った豊島区役所のホームページをプリントアウトして下さいました。

この資料によると、「豊島区は『赤い鳥』創刊の地として、同誌を区の重要な文化遺産と位置づけ、その功績を顕彰するとともにその理想を継承するため、区制60周年を機に平成4年から支援をおこなっている」のだそうです。

その他には、資料館の研究紀要の中から『赤い鳥』に深い関わりのある山本鼎の自由画運動に関する資料をコピーしたものと周辺地図とをいただいた上、雑司が谷旧宣教師館と、中央図書館までの道順などを詳しく教えていただくことができました。

●雑司が谷旧宣教師館

今度は、雑司が谷旧宣教師館です。雨は、まだ全然止みそうにないばかりか激しさを増してきました。資料館の方の話によれば、歩いて20分ほどのはずで、ごく近くまでたどり着いているはずなのに、なかなか目的地が見つかりません。傘は差していても、服はびしょ濡れ、せっかくだいたいた地図もすでにぼろぼろ・・・思い切って、コンビニで尋ねてもよくわからず、それでは、と道行く人に尋ねても、「最近、越してきたばかりなので・・・」と言われたり、そうかと思えば、あとわずか10メートルほどの所で「宣教師館はどこでしょうか。」と尋ねてみたりしながら、ようやくたどり着きました。

もうこの頃になると、入り口で傘を畳んで靴を脱ぐのにも一苦労するくらいになった雨風に見舞われながら、やっと中に入りました。ほっとしていると、奥からシルバー人材センターの縫い取りのある帽子をかぶった方（お名前を聞かなかったので“Aさん”と呼ばせていただきます。）が出て来られ、「こんな雨の中をよくおいで下さいました。」とねぎらいながら迎えて下さいました。

Aさんは、70代くらい、お話好きの方のようで、九州には知人が何人かいらっしゃるというご縁から、私が大分県は宇佐市から来たことをたいへん喜んで下さって、宇

佐出身の横綱双葉山のことなどいろいろ話して下さいました。

「『赤い鳥』のことには詳しくないけれど・・・」と言いながらも、小さいときからご家族が本好きで家には本がいっぱいあったこと、子どもの頃はこんなお話を読んでいた、ということなども聞かせて下さいました。

さて、この 雑司が谷旧宣教師館というところは、明治40年にアメリカ人宣教師のマッケーレブが自らの自宅として建てたもので、豊島区内に現存する最古の近代木造洋風建築であり、東京都内でも数少ない明治期の宣教師館としてたいへん貴重なものだそうです。



(宣教師館のはがきより)

昭和57年に、取り壊しの話が持ち上がったものの、関係者から取り壊しを惜しむ声が上がったこと、建築史の変遷を知る上でも貴重な建物であるということから、豊島区が買い取り、平成元年から一般公開を行っているそうです。

そして、『赤い鳥』の創刊者である鈴木三重吉の自宅が豊島区にあったことをゆかりとして、雑司が谷旧宣教師館の保存活動とともに館内に〈赤い鳥の部屋〉がもうけられ、『赤い鳥』や『金の船』、『金の星』などの復刻本が自由に閲覧できるようになされた、とのことでした。



(中・下段の右側が『赤い鳥』
左側が『金の船』『金の星』)

その部屋にさっそく入ってみました。暖炉のある書斎風の部屋で、壁に作り付けの書棚にずらりと、『赤い鳥』はじめ三種類の雑誌が並んでいます。他の棚には、坪田譲治はもちろん、小川未明、佐藤春夫ら『赤い鳥』関係者の著作もたくさん並べてあります。『赤い鳥』は、全部で196冊発刊されているはずですが、全巻ありそうです。(数えてみました。)

私はまだ『赤い鳥』初心者ですが、児童文学を調べている人にとっては、垂涎ものでしょう。

また、ここでは月に一度“『赤い鳥』を語り継ぐ、おばあちゃんのおはなし会”も開催されているそうです。

『赤い鳥』ゆかりの地とはいえ、『赤い鳥』など、当時の貴重な雑誌を全巻集めるためには、相当な熱意のある人、児童文学に造詣の深い人がいらしたに違いないし、『赤い鳥』を語り継いでいるという小森香子さんにもお会いしてみたいし、と興味は尽きません。

二階は、やはり雑司が谷に住み『赤い鳥』と関わりの深い執筆者だった小川未明の絵本の原画展が開催中であつたほかに、鈴木三重吉、坪田譲治、小川未明など豊島区ゆかりの人たちの写真付き解説パネルなども常設展として展示されていました。

見るものすべてにわくわくするものの、「赤い鳥文学賞」についてもまだ十分な手がかりがつかめていないし、知りたいことはたくさんあるし、とても今日一日一度来たくらいでは足りない感じです。それに『赤い鳥』に詳しい職員の方は、今日はお休みとのこと。「知りたいことを整理してまた来よう。」そう思いました。

やがて、閉館の時間も近づき、「どうぞくれぐれも気をつけて。」と、気遣われながら、次の目的地、中央図書館に向かうことにしました。

雨はますます激しくなっています。が、宣教師館で事務所の方もAさんも何かと親切に下さったことに励まされ勇気づけられたような思いがして、ここで雨風に負けるわけにはいかない、と傘の柄を握る手にもいっそう力がこもります。

途中、雑司が谷霊園の中道を通りながら、Aさんが「この霊園には、夏目漱石のお墓やいろいろな有名な人のお墓があるから、せっかくだから見て行かれたら。」と勧めて下さったことを思い出しました。しかし、九州より東の地の夕暮れは早く、季節外れの台風の連れてきた厚い雲が暗く立ちこめている中、さすがに霊園の中を彷徨うというのはちょっとためられて、宣教師館にもまた来るつもりなのだから、とお墓参りは延期することにしました。

●豊島区立中央図書館

中央図書館は、すぐわかりました。大分を出発する前に調べておいたので、ここには『赤い鳥』関係の本がたくさんあるらしいことはわかっていました。しかし、閉館まであまり時間がありません。何とか自力で、とは思いましたが、ここは司書さんに頼ることにしました。

司書さんが二人掛かりで探して下さいました。直接「赤い鳥文学賞」について書いてあるものは少なく、司書さんが「個人的にはとても興味のあるテーマなんだけど、なかなか見つからなくてすみません。」と申し訳なさそうに言われます。

けれども、手がかりになりそうな資料はいくつか見つかって、コピーしてもらいました。その中には、もちろん豊島区の図書館ならではの資料もあります。

直結するような資料はなくても、「赤い鳥文学賞」と同じ昭和46年には「赤い鳥の会」が結成されており、今も現役で活躍中の錚々たる児童文学作家たちが集まっていることはわかりました。この辺りのことを丁寧に調べていけば、答えに近づけるような気がしてきました。いろいろな資料を示して下さいのおかげです。

また、目白庭園に『赤い鳥』ゆかりの「赤鳥庵」^{ベキチヨウアン}があるので行ってみたらと、地図まで用意して持たせて下さいました。

「お忙しいのに、こんな時間に来て、いろいろお手数をかけてすみません。」と言う私に、「これが仕事ですから。」ときっぱり言われました。わざわざ大分から来たからとはいえ、見も知らぬ一介の利用者のために、自分も同じように興味を持ち、手間を惜しまず調べて下さったこと、私一人では出合えなかったであろう資料にも出合わせて下さったことなどに、さすがはプロの司書さんだと感謝しながら、図書館を後にしました。

●クレヨンハウス

作家の落合恵子さんが代表取締役をしているという“クレヨンハウス”、豊島区からあまり遠くないし、以前から行ってみたいと思っていたことと、子どもの本の専門店もあるから何かあるかもという期待から、行ってみることにしました。本当は、国際子ども図書館にも行くつもりだったのですが、悪天候のため、ここも今回は断念しました。

さて、風で折れて使えなくなった傘が何本も打ち捨ててある中、青山の街を必死で傘を支えつつ歩いた努力も空しく、わずか5分の差でタイムアウト。

本屋さんには入れませんでした。オーガニック・レストランの方はまだ開いていて、夕飯をおいしく頂き、今日のすべてのスケジュールが終わりました。

●目白庭園—赤鳥庵

翌日、10月28日。台風一過、さわやかな秋晴れの朝です。庭園は、目白駅から歩いて数分の所がありました。

実を言うと、もしかしたら雑誌『赤い鳥』の名前の由来はここにあるのでは、と期待していましたが、門外にある説明書によると、逆でした。

自分の勝手な思い込みに気づき、しばし呆然として立っていると、入るのをためらっているように見えたらしく、中から「無料ですから、どうぞ。」との声。その声に誘われて急いで中に入ると、そこは、ここが東京だろうか、まるで京都のお寺の境内に入り込んだかのように錯覚しそうな光景です。

ゆっくり一周しても10分掛からないくらいの大きさの池を囲んで、

本格的な日本庭園が作られています。池に注ぎ込む小さな滝や小川のせせらぎに癒されます。

数奇屋建築の赤鳥庵が、その池を覗き込むかのように建てられていました。有料貸し出しの建物なので、中には入れませんでした。茶道・華道などの趣味の集まりを中心に使われているのだそうです。 (赤鳥庵)



何か資料を見ることはできないかと見回しましたが、それらしいものはありません。庭のお掃除をされていた方にお尋ねすると、ここには何もないけれど、すぐ近くの“千草画廊”に何かあるかも、と教えて下さいました。

しかし、残念ながら、閉店中だったようで、入り口のプレートだけ写真に撮って、「赤い鳥文学賞」を探る旅は、ここで終わりにになりました。

●その後

雑司が谷旧宣教師館ではお会いできなかった『赤い鳥』に詳しい方に後日電話をすると、その方は、今度は、小峰書店の編集室長さんの名前を教えてくださいました。

今まで気づかなかったのですが、小峰書店のホームページには、“赤い鳥”のマークが使われていました。また、「赤い鳥さし絵賞」は、「児童図書出版社として『赤い鳥』の理想を継承する小峰書店（新宿区一谷台町4-1-5）の小峰広恵前社長（故人）を記念し昭和62年に創設された『挿絵（童画）』のための賞」であるというような縁もあるようです。

思うところあって、まだこちらには電話していませんが、いずれお電話させていただきたいと思っています。

●岡山へ

中央図書館で調べているうちにわかったことですが、坪田譲治は、岡山の出身でした。生家のほか、記念碑、“エヘンの橋”などお話にまつわるものもたくさんあるようです。岡山市内だけで、10館もの公立図書館もあります。

東京へは、日本図書館協会の全国大会への参加という目的もあって出かけたわけで

すが、実は来週は岡山へ出かける予定です。岡山は学校図書館も学校図書館を取り巻く環境もたいへん整っていると聞いて、市内の小中学校を訪問することになっているのです。

かくして、“「赤い鳥文学賞」を探る小さな旅”は、これからも行き先を変えて続いていくことになりそうです。

●おわりに

本に関わる仕事をなさっている方たちから、「本を通していろいろな人と出会うことができる」という言葉をよく聞きます。私も、この小さな旅の中で、どれだけ多くの見知らぬ方たちに出会ってお世話になったことか、そして、その方たちに背中を押していただかなかったら、知らずに終わってしまったこともどれだけあることか、と思います。

この紙面を借りて、改めて感謝の意をお伝えしたいと思います。本当に、いろいろとありがとうございました。

●参考文献

○高瀬西帆編著『群像豊島の文化人—豊島区ゆかりの文化人とその小伝—』サンライズ社、1992年、P.266-267

○『雑司が谷旧宣教師館たより』 第39・40合併号 2007,7,1日号

○URL

豊島区役所ホームページ

<http://www.city.toshima.tokyo.jp/press/index.html>

(おかもと みほ 別府大学研究生 中津市立北部小学校教諭)